新婦人を大きくして 戦争への道をとめたい

会員の前大会時現勢突破！

広島県本部　大平由美子

「要求いっぱい、会員大募集！　どの班も仲間ふやして　第32回全国大会成功へ！」オンライン全国交流会議（10月1日）での、広島県本部の発言を紹介します。

急速にすすむ大軍拡、学習し議論

9月30日の夕方から10月1日の朝にかけ、前大会時現勢を回復・突破しました。

夜中に報告をくれたのが、県常任の次世代メンバーOさんです。大学生の娘さんに「戦争する国にしたくない」という自分の思いを伝えたら「入会する」と言ってくれたそうです。そして今朝、東広島支部の八本松（はちほんまつ）班で「読者を会員に迎えたよ！思いが伝わったよ」と報告が入りました。

みんなで喜び合って

「今のこの情勢をみんなに知らせたい」「仲間づくりをあきらめない」と私たちを駆り立てている最大の力は、県常任委員会、そして県本部委員会での情勢の学習と議論です。

呉の日本製鉄跡地を防衛省が買い取る問題をはじめ、被爆地である広島市でも平和教材から「はだしのゲン」や「第五福竜丸」が削除され、平和記念公園と軍事施設であるパールハーバーが姉妹公園協定を結ぶなど、ありえなかったことが次つぎと起き、戦争する国づくりに向かっていると肌身で感じています。急速にすすむ大軍拡について学習し、繰り返し議論してきたことが次の三つの行動につながっています。

大軍拡の実態を知らせたい

一つ目は「班会開催としんぶんタイム、小組でのタイム」です。大軍拡を知らせるために作成した紙芝居を活用し、「選挙班会や小組でのタイムをもとう！」と班活動交流会でよびかけました。紙芝居を読んだ班や小組ではどこでも驚きの声があがりました。

三原支部久井班では「本当に第3次世界大戦が起きてしまうのでは…」「何ができるんだろう」と話し合いになったり、小組でも「しんぶんなんかいいよ」と言っていた人が誰よりもおしゃべりに参加したりと変化もありました。安芸（あき）支部など、支部から出かけていき全班で班会を開いたところもありました。

数年前まで20％台だった班会の開催が毎月40％以上となり、しんぶんタイムも定着してきています。小組では「政治の話をしたら、会をやめるんじゃないか」という躊躇（ちゅうちょ）の声もありましたが、学習し、大軍拡の実態を知れば知るほど、「そんなこと言ってられない」「知らせたい」と、思いきって小組でのしんぶんタイムに踏み出す力になっています。およそ7％から12％へと、小組のタイムも増えています。

要求でつながった人を仲間に

二つ目は原爆展・高校生の絵展の開催です。「班からの原爆展に挑戦しよう」のよびかけに、東広島支部や廿日市（はつかいち）支部など全班で原爆展開催が実現し、県内各地に行動が広がっています。

三つ目は仲間づくりです。呉支部では原爆展を見に来た、つながりのある人に「入会してくれたら平和運動の力になります」と話し、会員に迎えました。先日おこなった政府交渉で「呉日鉄跡地の防衛拠点化を止めたい」と読者を会員に迎えています。安佐北支部では選択的夫婦別姓の要求や「政治についておしゃべりしたい」の要求で次世代が2人入会。南支部では米産直で次世代が入会しています。小組の魅力での入会が最も多いのですが、平和、くらし、ジェンダーなどあらゆる要求でつながりあえる仲間づくりの可能性を感じています。「身近な地域に班がほしい」と、読者を会員に迎えながら県内で2つの班が誕生しました。班づくりの土台となっているのは、行動する新婦人への信頼と確信です。

歴史の岐路に立ついま、あらゆる世代のあらゆる要求をもつ女性たちをつなぐ新婦人があってよかったと思わずにいられません。「要求でつながろう」「行動し、一緒に変えよう」と、班からの仲間づくりを広げていきたいです。沖縄に続き、広島もさらに大きくなって、全国の新婦人の仲間と一緒に戦争への道を止める決意です。

【訂正とおわび】10月4日号7面の記事で「昨年結成した呉支部」とありますが、「昨年結成した」を削除します。確認が不十分でした。訂正し、おわびします。

主張

次世代の直接体験で仲間づくりを

第32回全国大会まであと1カ月を切りました。中央本部は、「オンライン次世代全国ミニ交流」を10月3日から31日までの毎週金曜、5回連続で開催します（20時20分～21時）。これまで月1回、40回を超えて平和やジェンダー、選挙などをテーマに続けてきたミニ交流は、点在しがちな次世代の会員が新婦人という共通の話題でつながり、共感を深め、仲間がいることを実感できる場として好評です。

全国大会に向けて、つながりのある女性をゲストとして誘い、全国の仲間との出会いをとおして新婦人の活動を知ってもらい、新しく仲間に迎える機会として毎週開催を位置づけます。

さらに、12月3日には次世代国会行動にとりくみます。新婦人「みらい基金」から都道府県から3人を上限に交通費を補助し、国会議員や省庁への要請に挑戦します。

これまでの国会行動では、選択的夫婦別姓や不登校問題、ネットアダルト広告の問題をはじめ多岐にわたる「私の声」を直接議員や省庁に届け、交流で全国の仲間とエンパワーし合う機会となってきました。

「働いているから」「忙しそうだから」と躊躇（ちゅうちょ）せず、この間の選挙や運動で知り合った女性に、思い切ってミニ交流や国会行動への参加を呼びかけましょう。自分の思いを言葉にし、仲間と語り合い、国会や省庁に直接声を届けられる絶好の機会でもあります。「気軽に参加してみて」と誘い、ゲストを迎える場としても活用しながら、次世代自身が仲間づくりにとりくむ機会にもしていきましょう。

聞き書き

母の歴史

沖縄県　外間（ほかま）久子（さん）のお話　（5）

3066

1955年、高校2年で函館・遺愛（いあい）女子高校へ転校。その際、北海道から先生が迎えに来てくれ、船で行きました。3月の北海道は、木に白い塩をかぶせていて何だろうと思いましたが、後で雪とわかりました。街は黒くなった残雪で、沖縄とは景色が違うなと思いました。

北海道では沖縄の現実から解放され、有意義な高校生活を送ることができました。そして、沖縄を変えたいという思いが湧いてきました。沖縄に帰り、新しくできた沖縄キリスト教短期大学の1期生として入学し、教会関係の仕事をするつもりでした。

遺愛女子高校の正門（函館市）
（同窓会カレンダーより）

「沖縄を変えたい」

戦後は仕事が少なく、米軍米兵関連で働く女性が多く、米兵家庭のメイドや飲食店で働く女性が、レイプされて殺されるなど重大事件が続きました。米軍、米兵が起こす事件事故も多発しましたが、ほとんどが罪に問われることもありませんでした。教会で、「犠牲になった人たちのために祈りましょう」と提案したのですが、日本人の牧師も、教会に通っていた沖縄の人たちでさえ受け入れてくれませんでした。こんな大事なことなのに祈りもできないなんてと思い、その頃教会から離れました。米軍の宣撫（せんぶ）工作で作られた教会だからだと思いました。そして、戦争孤児や沖縄の子どもたちのことに関わりたいと思い、1959年、東京の福祉学校に1年間行くことにしました。　つづく